

令和 7 年 10 月

東京都建設局

「土砂災害防止に関する絵画・作文」

令和 7 年度 受賞作品決定のお知らせ

東京都では、6 月の土砂災害防止月間の一環として、小・中学生を対象に土砂災害防止に関する絵画・作文の募集を行いました。その結果、合計で 66 点の応募がありました。その中から選考を行い、絵画の部（小学生）2 点、同（中学生）2 点、作文の部（小学生）1 点、同（中学生）2 点の受賞作品を決定しましたのでお知らせします。

建設局長賞 絵画の部(小学生)



江東区立
豊洲小学校
4年 松本 桐花さん

建設局長賞 絵画の部(中学生)



府中市立
府中第五中学校
2年 石井 葵さん

河川部長賞 絵画の部(小学生)



国立市立
第四小学校
6年 江藤 梨さん

河川部長賞 絵画の部(中学生)



江戸川区立
松江第二中学校
3年 松田 里恋さん

身近に感じた土砂災害

目黒区立不動小学校

三年

豊岡 楓

学校で、防災について書いてある「東京マイ・タイムライン」をもらいました。土砂災害なんて遠くの話だろうと思いつながら東京都の「土砂災害警戒区域等マップ」を調べてみると、家から歩いて10分のところにあぶない場所があったのでおどろきました。

行ってみると、大きなたて物のうらに急なしゃ面があり、そこをコンクリートでかためてありました。ところどころメロンみたいなヒビが入っていたり、大きなシートもかかっています。

その近くにも、家よりも高いがけがありました。がけに草が生えていたので目立たないのですが、家のすぐうらに金あみでできたフェンスがあつて、そのすぐ向こうがけになっていたので、近すぎてドキドキしてしまいました。

東京都が出しているパンフレットによると、土砂災害から安全ににげるためには、三つのことが大切だそうです。

一つ目は「土砂災害のおそれのあるか所を知る」。二つ目は「ひなんばしょ・にげ道を知る」。さい後は「きけんなときに出されるじょうほうを知る」です。

さい近は急に大つぶの雨がふりだして、しばらくふりつづけるゲリラごう雨も発生しています。

先日も急な大雨とカミナリで、学校から帰れなくなったことがあります。その時はカミナリが落ちて、学校の電話もつながらなくなりました。通学路によっては、ひざ下まで水が流れている場所もあったそうです。

このように、ごう雨が始まってしまうと外へ出てい動するのはむずかしいです。また、スマホを持っても、つながらなくなるかもしれません。

何でもない日に、家のまわりや通学路のあぶない場所を

かくにんしたり、災害にそなえてじゅんびしておくことで、土砂災害が起きてもぎせいをへらせるのではないかと思いましたが。ふ通の住たくがいに住んでいても、土砂災害は身近で起こるかもしれないと思いました。

「未来につなげる」ために

葛飾区立新宿中学校

三年

菅原 蒼生

来年度、私は高校生になります。進路や将来について考えることが増える中で、先日受けた理科の授業が、私の心に強く残りました。それは、平成二十五年十月に伊豆大島で起きた土砂災害について学ぶ授業でした。担当の先生は、災害のあとに伊豆大島の学校で勤務した経験がある方で、地域の方々から実際に聞いた話や、現地の様子を交えて教えてくれました。

先生は、「私は災害を直接経験してはいません。でも、災害の爪痕が残る場所で何年も働きながら、町の方々から当時の話を聞いてきました。」と語ってくれました。その言葉には、ただの教科書には載っていない“生きた記憶”が詰まっているように感じました。

先生によると、土砂災害が起きたのは、記録的な大雨が島を襲った夜だったそうです。土石流は山の上から一気に流れ下り、元町地区では大きな被害が出ました。川のようなになった泥水が家を飲み込み、多くの人が命を落としたという話を聞き、私は自然の力の恐ろしさを感じました。

先生は、地域のあるおばさんの話を紹介してくれました。「あの夜、雷のような音がして、外を見たら、もう家の前は川のようにだった。家族と一緒に逃げる時間もなかった」と。その声は涙混じりだったそうです。こうした話を何度も聞くうち、先生自身も、「伝えることの重さ」を感じるようになったと話していました。

また、この授業では「ハザードマップ」の話もありました。伊豆大島には災害前から土砂災害の危険を示す地図があり、実際に被害の出た場所は危険区域として色が塗られていたそうです。私は「ハザードマップって、見るだけで意味あるの?」と思っていましたが、この話を聞いて、そ

れが命を守るための“地図”なのだとして初めて実感しました。授業の後、私は図書館で伊豆大島の災害跡地の資料を調べに行きました。十年以上が経っていても、山肌には崩れた跡がはつきりと残っていて、先生が「この場所に家があったんです。」と説明してくれたときには、想像もできないような恐怖を感じました。

現地では、災害を経験した地域の方のお話も聞くことができました。あるおじいさんは「こんなことになるなんて思ってたなかった。でも、避難するって決めるのは、いつも難しいんだ」と話してくれました。その言葉の背景には、災害の恐ろしさだけではなく、“どこまで危機を自分ごととして受け止められるか”という人間の弱さもあるように感じました。

ハザードマップを見ても、それを「本当に危ない」と思えるかどうか。自分自身がそれを信じて、早く動けるのか。私は、その難しさと大切さをこのとき強く感じました。地図に色がついている場所に、実際に大きな土石流が流れたという現実には、「見た目」ではなく「正確な情報」に目を向ける大切さを教えてくれました。

理科の授業というと、実験や公式を学ぶイメージが強かった私にとって、今回のような学びはとても新鮮でした。自然現象を知識として理解するだけではなく、それが人の命や生活とどう関わっているのかを学ぶこと。それこそが、理科を学ぶ意味なのだと気づかされました。

また、「災害を経験していない人が、それをどう受け取り、伝えていくか」も大切なテーマだと思いました。先生も、「私は当時いなかったけれど、現地の人から教えてもらったことを、次の世代に伝えていきたい」と話してくれました。私はその姿勢に強く心を打たれました。

来年度から私は高校生になります。この先もっと多くの知識や経験を積んでいく中で、今回の授業で学んだ「命と向き合う学び」を忘れずにいたいのです。そして、もし自分の身近で災害が起きたときには、ハザードマップを手に取り、そこにある情報を信じて行動できるようにしたいと思います。

土砂災害から命を守るために

葛飾区立新宿中学校

三年

巻口 結芽

私たちの学校では、理科の授業の一環として土砂災害について学びました。映像や資料を使って、山の斜面が一気に崩れる様子や土砂が流れ出す光景を見て、その恐ろしさや自然の力の大きさを実感しました。あの映像を見て、「自分の周りでこんなことが起きたらどうなるだろう？」と考え、恐怖とともに備えの必要性を強く感じました。

さらに、先生から伊豆大島で実際に起きた土砂災害の経験談も詳しく聞きました。先生は、「山の斜面が崩れ、多くの家や道路が土砂に埋まった」と言っていて避難のタイミングを逃した人たちがどれほど恐怖に震えながら必死に安全な場所へ逃げたのか、その話を聞いて胸が苦しくなりました。実際の被害者の話を聞き、自然の猛威に対して私たちがどれだけ無力かを感じました。映像や経験談を通じて、自然の力の大きさとその怖さを身をもって感じました。土砂が流れるスピードやその威力には驚かされ、自然の前では人間は本当に無力だと感じます。だからこそ、災害が起きたときに慌てずに落ち着いて行動できるよう、普段からの備えがとても大切だと思いました。私は家族と一緒に避難場所や避難経路を確認し、災害の際に慌てず冷静に行動できるようにしています。

また、担任の先生は東日本大震災の経験の話もしてくださいました。津波によって命を失った人や、避難の苦労を聞き、「自然の脅威に対して私たちにできることは限られているが、備えることは誰にでもできる」と強く感じる事ができました。

災害はいつどこで起きるかわからないため、「自助」の精神を持ち、自分の命や大切な人を守る行動の重要性を深く理解しました。私たちは、「自助」だけでなく、「共助」の精

神も大切だと考えています。地域や学校で助け合うことです。例えば、避難訓練のときに迷ったり不安になった友達に声をかけることや、避難場所を確認し合うことも、その一つだと思います。

去年は、中川の氾濫を想定した避難訓練に参加しました。校舎の屋上まで避難し、水が迫る恐怖を少しでも体験しましたが、土砂災害はもっと早く、突然やってきます。そのため、授業や先生の話から得た知識や経験を忘れずに、危険を察知して素早く行動できる感覚を養うことが必要だと考えています。

また、私はSNSを活用して防災に関する正しい情報を広めたいと思っています。SNSは、多くの人に素早く情報を伝えられる便利なツールですが、同時に誤った情報やデマも拡散しやすいです。だから、情報の正確さを確認しながら、自分が学んだ防災の知識や安全を守る手助けをしたいです。

これからも、自然の脅威に備えるために、日常のちよつとした心がけを続けていきたいです。家族や友達と話すことや、防災グッズを準備したり、避難訓練に参加したりすることで、自分や周りの人を守る力を高めていきたいです。災害はいつ訪れるかわからないけれど、事前に備えておくことで被害を少なくできると信じています。自分の行動や意識を少しずつ高めていくことが、とても大切だと思います。これからも、自然に負けないために、常に備えと意識を持ち続けていきたいと思っています。